

実践事例 3

香川県立高松北中学校・高校は、県内唯一の公立中高一貫教育校として、6年間を見通した教育活動を展開している。その土台となっているのが、県が全国の自治体に先駆けて各校に策定を求めた「スクール・ポリシー」だ。多様な教育活動の意義をスクール・ポリシーの下で改めて整理し、それぞれの活動に取り組む教師、生徒の意識改革へとつなげている。

スクール・ポリシーを軸に、多様な教育活動を再編。

生徒、教師、地域が活動の価値をともに理解する

香川県立高松北中学校・高校

スクール・ポリシーで学校の進化を促す

香川県唯一の公立中高一貫教育校である香川県立高松北中学校・高校。現在、難関国公立大学を目指す飛翔コース、国公立大学文系学部を目指すグローバルコース、国公立大学理系学部を目指す

サイエンスコース、そして、学校推薦型選抜、総合型選抜での進学を目指すカルチャーコース、スポーツコースの5コースを設置している。部活動にも力を入れており、全国大会へ出場している部も多い。また、近年はグローバル教育を軸にしたキャリア教育に力を入れてきた。そうした積み重ねは、「東大からオリンピックまで」のスローガンに昇華し、長く地域の信頼を得てきた。だが一方で、

「中学校と高校の連携が不十分で、コースや分掌がバラバラに動いている」「それぞれの教師がどんな課題意識を持ち、学校全体としてどのような生徒の育成を目指しているのかが見えにくい」といった課題も教師たちは感じていた。2020年3月、香川県は「魅力あふれる県立高校推進ビジョン」

」を策定し、特色ある県立中学校・高校づくりを加速。全県立中学校・高校で21年度に「スクール・ポリシー」を策定することを決定した。20年度には、高校入試で全国募集を開始した高松北中学校・高校を含む14校が先行してスクール・ポリシーを公開した(図1)。國木健司校長は「本校が積み重ねてきた教育活動を整理しながらスクール・ポリシーを考えた」と振り返る。

「これまでの教育活動を土台に、生徒、保護者、地域が持っている期待や課題などの現状も踏まえてスクール・ポリシーをつくることで、教育活動を再編成し、学校の進化を促進したいと考えました」

生徒の持つ力に目を向け、理想の学校像を描く

教頭として同校に勤めた経験もある國木校長は、同校赴任歴の長い教師たちの声なども参考に、生徒の現状を整理していった。その際、特に重視したのが「生徒が持つ強み」だった。

学校概要
 設立 1983（昭和58）年
 形態 全日制／普通科／共学
 生徒数 1学年約230人
2021年度入試合格実績（現浪計） 国公立
 大は、北海道大、東京外国語大、京都大、神戸大、
 広島大、香川大、大阪市立大などに44人が合格。
 私立大は、青山学院大、法政大、明治大、同
 志社大、立命館大、龍谷大、関西大、近畿大
 などに延べ299人が合格。



校長
國木健司
 くいき・けんじ
 教職歴36年。同校に赴任し
 て4年目。



進路指導部長
大野郁子
 おの・いくこ
 教職歴31年。同校に赴任し
 て5年目。英語科。



主幹教諭
宮地幸喜
 みやうち・こうき
 教職歴30年。同校に赴任し
 て2年目。国語科。



3年生担任
筒井京
 つつい・けい
 教職歴22年。同校に赴任し
 て12年目。地理歴史・公民科。

「本校には、放課後、学校に残って勉強する生徒がたくさんいます。先生たちも校務の合間に生徒の様子を見に行き、親身に指導するなど、生徒と教師のつながりが

図1 スクール・ポリシー

●このような生徒を求めています。

- 1 主体的な探究・実践意欲にあふれ、高い志をもって積極的に学習に取り組む生徒
- 2 部活動等のすぐれた成果や実績を、入学後もさらに伸ばす意欲のある生徒

●このような学びを行います。

北高独自の5大プロジェクトを中心に、次のような先進的な学びを計画的に行います。

- 1 計画的なグローバル教育を展開し、豊かな国際感覚と高度な英語コミュニケーション能力を育む。
- 2 探究型・課題解決型の教育を展開し、主体的に課題を発見・解決していく探究力・実践力を育む。
- 3 幅広い年齢層との交流行事や国内外への多彩な研修旅行を通して、豊かな人間性や社会性を育む。

●卒業までにこのような生徒を育てます。

幅広い知識と高い学力、課題解決に向けた探究力・実践力を身につけ、グローバルな視野をもって主体的に社会の未来を切り拓く力と心豊かな人間性を備えた次世代社会創生リーダーを育成する。

※学校資料を基に編集部で作成。

とても強い学校です。また、生徒たちは挨拶もしっかりできます。勉強やスポーツに限らず、生徒はいろいろなよさを持つていることに気づいた私は、どんな長所も伸ばせる学校、生徒の夢は全部かなになりました」（國木校長）

図2 指導計画

すべての生徒が輝き未来を創造する / 高松北高校
 グローバルな感性と幅広い視野、主体的な行動力・実践力で新たな社会を切り拓く
「次世代社会創生リーダー」を育成

北高独自の5大プロジェクト

- キャリア開発プロジェクト**
 - 専大からオンラインレポートまで、最先端のキャリア教育
 - キャリア教育推進計画で学校の授業
 - キャリア・サポートによる計画的キャリア形成
 - ・ 職業体験作成
 - ・ キャリア開発プログラム
 - ・ 職業ガイダンス
 - ・ 職業合同企業研修
 - ・ 職業合同企業研修
- グローバル人材育成プロジェクト**
 - 3年間の計画的なグローバル教育
 - 様々な国際感覚・高度な英語コミュニケーション能力
 - 留学先への多彩な研修旅行実施
 - ・ 海外留学研修
 - ・ 分科別海外研修
 - ・ 異文化理解旅行
 - ・ 国際交流プログラム
 - ・ 海外への研修旅行
 - ・ 英語プレゼン力向上授業
- 探究力育成プロジェクト**
 - 活動型リーダー育成プロジェクト
 - 高度な探究力と実践力
 - グローバルな視点での知識習得
 - 探究力育成プロジェクト
 - ・ 総合的や各教科の授業での探究的な学び
 - ・ 関係機関へのフィールドワーク
 - ・ 先生・生徒・保護者・地域との連携
 - ・ 探究成果発表会参加
- ニュー・アジアプロジェクト**
 - 学校独自に世界有数のアジアリゾート
 - 高度な探究力と実践力
 - スポーツによる知識習得
 - スポーツによる知識習得
 - 学校創設での交流
 - ・ 海外研修の開催
 - ・ 施設・設備の充実
 - ・ 海外への遠征
 - ・ 国際交流
 - ・ プログラムの展開
 - ・ スポーツ研究旅行
 - ・ スポーツの発展
- ニュー・グローバルプロジェクト**
 - 学校独自に世界有数のアジアリゾート
 - 高度な探究力と実践力
 - スポーツによる知識習得
 - スポーツによる知識習得
 - 学校創設での交流
 - ・ 海外研修の開催
 - ・ 施設・設備の充実
 - ・ 海外への遠征
 - ・ 国際交流
 - ・ プログラムの展開
 - ・ スポーツ研究旅行
 - ・ スポーツの発展

※学校資料をそのまま掲載。

國木校長は「すべての生徒が輝く、活力にあふれた学校づくりを実現し、次世代の社会を創生する人材を育成する」ことを目指した中高6年間のスクール・ポリシーを策定、さらにキャリア教育、学力育成、グローバル教育、探究学習、そしてアスリート支援と、同

校がこれまで重点的に取り組んできた5つの教育活動を、5大プロジェクトとして再編成した指導計画(図2)を職員会議で提案した。長所や得意分野、そして進路も多様な生徒を多様なコースで育てる本校だからこそ、「すべての生徒が輝く」というフレーズが教師

の共感を呼んだと、同校の卒業生でもある筒井京先生は語る。

「そのフレーズにハッとすると同時に、どうすればそれが実現できるのだろうかと考えました。そして、きつとそれぞれの教師が、得意分野を生かしながら今まで以上に連携し、1人の教師として輝けば、生徒たちはさらに輝くのではないかと思いました」

スクール・ポリシーを通して 教育活動の価値を再考

スクール・ポリシーと指導計画を公開した20年度、その実現に向けて、同校は様々なアクションを起こした。その1つが中学校との連携だ。進路指導部長の大野郁子先生は、「スクール・ポリシーによって、中学校と高校の6年間でどのような生徒を育てるのかの目標合わせができた」と語る。

「中高が連携した早期の大学入試対策として、高校の飛翔コースに接続する『先取りコース』を中学校につくったこともあり、中高の教師がこれまで以上に授業の内

図3 スクール・ポリシーに対するアンケート

「高北スクールミッション達成のための3つのポリシー」について

3月職員会議資料でお示ししました標記のことについて、ご意見等をお願いします。

○アドミッションポリシー（求める生徒像）

保護者や小・中学生にとって
もっと分かりやすい表現に

①の「教育目標を理解する生徒」とすると、北中を志望する小学6年生にはハードルが高いものになると思います。「理解しようとしている」とか「賛同している」とか、もう少し表現をやわらげるのはどうでしょうか。

○カリキュラムポリシー（教育方針）について

育成を目指す生徒像を伝わりやすく

「自ら困難に立ち向かうたくましい人間」とすると、自ら進んで困難にむかっていくように受け取ります（私自身は）。「困難を乗り越えることができる人間」というような表現に変えるのはどうでしょうか。

○ディプロマポリシー（卒業時に身に付ける力）について

評価の仕組みづくり
の必要性を確認

幅広い知識や高い学力、探求力や行動力など、基準をどこにもってくるのかなと思います。後々、練っていく話だとは思いますが…

○育てたい「10の資質」について

育成を目指す資質・能力
を現場感覚で問い直す

「論理的・多角的に探求していく力」に多面的という言葉は不要でしょうか。一つの事象に対して、別の面から探求する力も必要かもしれないと思います。

21年3月、職員会議で全教師にスクール・ポリシーに対して改善すべき点がないかを聞くアンケートを実施した。複数の教師がチェックすることで、言葉遣いから育成を目指す資質・能力の設定、さらにはその評価の仕組みまで、様々な観点の意見が挙がった。

※学校資料をそのまま掲載。

容などについて情報を共有する機会が増えました。『北高に行くまでに、この生徒のこんな力を伸ばしてあげたい』といった言葉を、中学校の先生方からよく聞くようになりました」（大野先生）

主幹教諭の宮宇地幸喜先生は、グローバル教育や探究学習が、スクール・ポリシーを実現するためのものとしてつながりを持って理

解できるようになったと語る。

「県内に居住する外国人との交流や、地元企業、商工会などと連携した地域課題研究で、生徒は様々な人たちと接します。そうした活動が表面的なものにとどまらないよう、活動ごとに学年主任が目標を掲げ、それを生徒と共有し、昨年度から活用している『キャリア・パスポート』で振り返りをさ

せています。スクール・ポリシーを土台に各活動の目標を、教師はもちろん、生徒も常に意識することができるようになりました」

「スクール・ポリシーは、各教室に掲示しており、生徒にも浸透していますが、私たち教師も、スクール・ポリシーを意識すること、探究力の土台としての思考力を測るテスト問題の精選など授業

改善につながっています」(大野先生)

部活動のような既存の活動の価値の再確認につながったと、応援部顧問でもある筒井先生は語る。

「スクール・ポリシーにおいて、本校が世界を目指すアスリート为学校全体として支援していることが明示されたことで、応援部の生徒は、自分たちの活動の価値を再確認することができました。また、私自身も、応援部の活動が生徒のどのような資質・能力を高めているのかを改めて考え、それを論文にまとめることができました」

スクール・ポリシーで 校内外がつながっていく

近隣の小・中学校、さらには塾に広報活動を行う際に、同校の教師たちはスクール・ポリシーについて丁寧に説明するようになった。在校生の保護者にもスクール・ポリシーは浸透し、保護者から「子どもには、高校時代に5大プロジェクトにこうかかわらせたい」などと希望を聞くことも増えたと

いう。また、スクール・ポリシーを公開したことで、近隣の大学やNGO、経済団体など、外部組織へも学校としての教育活動の目標が伝えやすくなり、外部連携がスムーズになるというメリットが得られた。既に同校では、5大プロジェクトすべてにおいて、外部組織と継続的な協力を得られるよう、協定を結んだという。

スクール・ポリシーは毎年、アンケート(図3)を通じて見直しを行っている。

「本校が創立時から掲げる信条『人に迷惑をかけない・人を侮辱しない・困難から逃げない』を盛り込んでどうか、課題研究の成果を踏まえた社会貢献の観点を強く打ち出しているか、さらには小・中学生向けにもっと平易な言葉にしてはどうかなど、多くの意見が先生方から集まっています。スクール・ポリシーを軸に、すべての生徒、すべての教師、そして5つのプロジェクトがつながり、輝くことができるように、スクール・ポリシーと教育活動の見直しを続けていきます」(國木校長)

香川県教育委員会に聞く

2021年度 すべての県立高校が スクール・ポリシーを策定

急速な社会の変化、そして、生徒の学びのニーズの多様化などを踏まえ、香川県では2020年3月に「魅力あふれる県立高校推進ビジョン」未来を生きる力を育む 特色ある学びの場をめざして」を策定し、県を挙げて「学校の特色化・魅力化」を進めています。具体的には、すべての県立高校において、「地域課題を題材とした課題解決学習」「多様な国内外の高校、大学、研究機関、企業等との交流」「現代社会の諸課題への主体的な取り組み」を共通して推進。その上で、各学科・課程において特色を生かした教育活動の展開を目指しています。

各県立高校が特色ある教育活動を行う中で、中学生が自らの志望にふさわしい高校を選んでいくためには、各校の教育内容に関する十分な

情報が必要です。そこで、香川県では、今年度、22年度高校入試に向けて県内すべての県立高校が「スクール・ポリシー」を策定し、「どのような生徒を求めているのか」「高校ではどのような学びを行い、どのような資質・能力を育成するのか」「高校卒業時までどのような人物を育てるのか」の3点を具体的に示して周知を図ることにしました。それに先立って、21年度高校入試では、全国からの生徒募集を始めた14の学校・学科が、スクール・ポリシーを発表しました。スクール・ポリシーは、広報面のみならず、入学から卒業までの教育活動における一貫性を強化するという点でも意味があります。そして、自校の強みを再認識した上で、育成を目指す生徒像をどのように実現していくのか、教師が校内で対話していく土壌づくりにつながることが期待されます。

22年度以降、各校には毎年スクール・ポリシーの見直しを求める予定です。目の前の生徒を見つめながら、柔軟に変えていくべきもの、変えてはいけないものを各校で追究する営みが続いていくこととなります。

「お話を聞いた先生 高校教育課課長補佐(兼)主任指導主事 橋本和之先生 / 高校教育課主任指導主事 住野正和先生